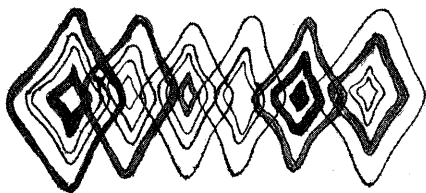


私の出会った人々 (二)

安島 智子



◇はじめに◇ 子どもらしさと子どもの位置

私はそれまで、子どもはかわいらしく、生命力に充ちた生き生きとした存在であり、しかもそれは全ての子どもに平等に与えられた子ども故の性質であるものと思っていた。しかし、このような私の思いこみは臨床体験によってみごとに覆されたのである。子どもの持つかわいらしさや、生命力に充ちた子どもらしさというのは、子どもがそのようにいられるような大人との関係があって育まれ、この育みによって本来的に在るものが現れ出たものであるということを実感したのだった。臨床家の仕事というのは、この本来的に在るものが発動し、現れ出づることを願ってクライアントを育んでゆく仕事である。こうして考えてみると、心理療法とは、育むことそのものである。昨今の流行語を用いるならば、「究極の保育」というところであろうか。

確かに子どもは誕生してからの時間が大人ほど長かつてはいないこともあって、人が生まれ来て、還り往く所により近く位置していると言えるのかもしれない

い。その意味では、子どもは人間存在の根源としての世界に境界をより近くしているものと考えられる。それ故にその世界の生成性や発展性、創造性といった性質を発動しやすい状態に在るし、一方ではその世界の暗さや虚無性、沈滞性をも敏感に知り得るものと思われる。

子どもの根源的存在と世界の境界の持ち方がその子らしさとどのようにかかわっているのか—その子が生き生きしているにしても、不安な様子にしても—という捉え方をしてみることは子どもを育む場においては意味ある視点ではなからうか。

それはまた、生まれて以来の歴時間の座標軸に収束される事柄と根源的存在と世界との関係のありようが、今、ここにいるその人のありようとなるものと考ええるからである。

◇子どもらしく、かわいらしくなった男の子◇
△物おしせず、一見元氣そうに見える幼稚園年長児ゆう

ちゃん(仮名)のこと▽

〔最初の印象〕

ゆうちゃんは、色黒で、半ズボンからのびた素足にズック靴をはいた勢いのいい子だった。初めて会ったこの日の第一印象は「かわいくない子」というのが正直な実感であった。それまで子どもに対して、「かわいくない」と感じる体験がなかった私は、その子どもらしくないさに大変ショックを受けたのだった。

〔ゆうちゃんが来談するきっかけになったこと〕

ゆうちゃんが来談することになった動機は「発音がはつきりしない」ことや「友達と遊べず、いつも一人遊びをしている」ことを理由に幼稚園の先生から来談を勧められたからである。

〔家族と生育歴〕

会社員の父親(47歳)、洋裁をしている母親(39歳)、本人(5歳6か月)の三人家族である。母親の話によると、ゆうちゃんにとって母親はこわい人で、父親はゆうちゃんの家来とのことであった。ゆうちゃんが友達と遊べないのは、母親がいつもゆうちゃんについて歩いたせ

いかかもしれないと、家の中においても子どもの泣き声が聞こえると居ても立ってもいらなくなるとのことが話された。

生育歴の事項に書かれたことでは、おむつを十か月でやめていることや、二歳以後もよだれが出ていたこと、爪かみがあり、友達がいけないことなどが気になった。こうした母親が気づいて書いて書いた内容からだけでも、お母さんへの最初のプレゼントであるウンチを充分に受けとってもらえなかったことに現される母子関係の問題や、二歳以後のよだれから、この子の不安な状態が、爪かみからは攻撃性が自分に向かうしかない状態であることが、友人がないことから、人との関係を上手につくれないことが推測される。

（ゆうちゃんの悩み）

ゆうちゃんは、いろいろなことがよくわかった頭の良い子だったが、幼稚園生活はなかなか大変であった。ちょっとしたことから、「ウソツキ」にされてしまい、お友達からいじめられたり、なんでも欲しがるからと、幼

稚園の先生に「お食食さんだ」と言われたり、いじめられて泣いて帰ると「やられたら、やりかえしなさい」と叱られたり、悔しいことがいろいろあったのである。

これらのことをもうすこし詳しく話してみよう。

ゆうちゃんが「ウソツキ」と言われるようになったのは、こんなことがあったからだ。

ある日曜日に、ゆうちゃんは引越しをして遠くに行つたお友達の家にお母さんと行くことになった。しかし、ひどい雨が降ってしまったのでお母さんは中止にすたくなつたのだが、ゆうちゃんはなかなか納得しない。そこでお母さんは、「火曜日に行こうね。幼稚園を早ぼけて。お母さんが迎えに行つてあげるから」と言つて説得し、その計画をとりやめることに成功した。

火曜日、ゆうちゃんは幼稚園に行き、「今日ね、しんちゃんとこに行くんだよ。早ぼけて。お母さんが迎えに来るの」と先生やお友達に言っていたのだが、お母さんはゆうちゃんがその後何も言わないのもういいものかと思ひ、ゆうちゃんをむかえに行かなかつたのだ。お

母さんが迎えに来るものと待っていたゆうちゃんは、お友達から「ウソツキ」と言われ、とうとう「ウソツキ」にされてしまった。子ども達は、「ウソをつく子はよくない子」と教えられていたので、ゆうちゃんはとても辛い思いをしていたと思う。

また、ゆうちゃんはお友達が持っている物をいつも「ほくも欲しい」と思う一方、また自分の持っているものをお友達によくあげたがった。外に遊びに行く時にあげるものを持って出ないと出かけられない時もあるほどだったのである。お母さんはゆうちゃんが他人の物を欲しがることをゆうちゃんの短所としてあげ、ゆうちゃんが人に物をあげたがることを「人がいい」と長所としていた。幼稚園の先生の意識では他の子の持っている物を欲しがることに對して、具体的にわからせようと「お食事さん」と呼びかけ、なんでもほしがる乞食のようなことをしてはみっともないのだということをお教えしようとしていたようだ。しかしこれは幼稚園の先生がゆうちゃんをかわいいと思えていないことやゆうちゃんによって先

生の攻撃性が刺激され、それがゆうちゃんに向けられていることによるもののように思われる。ともあれお母さんも幼稚園の先生もどうしてゆうちゃんがこういう気持ちになるのか理解できなかったし、気づかなかったように見受けられた。

さらにまた、ゆうちゃんは家に泣き帰ることがよくあったのだが、お母さんは、「男の子は泣くものではありません」とか、「やられたら、やりかえしなさい」と言っていたそうだ。

ゆうちゃんはこんな時、くやしい気持、悲しい気持、情けない気持をどうしていたのであろうか。どうしていいとよいのだろうか。

この辺でゆうちゃんのブレイルームでの様子に話を向けていきたいと思う。

―ブレイルームでのこと―

「一人で遊ぶ」

初めて来談した日のゆうちゃんは、母親といっしょに

プレイルームに入った。母親はゆうちゃんに次々と指示をする。そこでセラピストの私は、「お母さんはこちらにどうぞ」とゆうちゃんからすこし離れていてもらっていた。するとゆうちゃんはプラレールを手にし、かなり集中して手ぎわよく線路を組みたて続け、できあがると汽車を走らせるのだが、すぐに「ガーッ」という大声と共にそれらをメチャクチャに崩し、また組みたてて走らせるということを繰り返すのだった。その間は相手が必要とする様子もなく、夢中で遊んでいる。

この様子は一見して元気な子どもと受けとれなくはない。しかし助けや仲間を必要としている様子もなく、動き出すと破壊することを繰り返す姿になんとも言えない気持ちになった。動き出すと破壊されるこの汽車はゆうちゃん自身の姿でもあったのかもしれないが、また同時に自らの内で自己完結させようとするかのごとき破壊的な攻撃性を感じたのだった。そしてその表情はなんともかわいくなさを感じたのである。

この破壊的な遊びは、二回目のセッションでは自動車

を壁にむかって走らせ、くり返し壁に衝突させる遊びや、ボールを床や壁に投げつける遊びへと変化した。これはゆうちゃんの未解決な気持ちと、そのエネルギーを壁や床にぶつけ、投げだしているように感じられたので、ゆうちゃんがボールを投げつけた時には必ず拾うようにした。繰り返し、繰り返し、拾い続けた。ゆうちゃんを受けとめ続けたのだ。

すると、三回目のセッションではこのボールを投げつける動きが、ビックボールを転がすことに変わっていった。この変化は、攻撃的なエネルギーや憤りの気持ちが受けとめられたことにより、エネルギーが突出する動きから、回転する動きに変化してきたものと思われた。

【関係のはじまり】

四回目のセッションでは、ゆうちゃんがトランポリンの上にあがるのについて私もあがった。すると彼はあくらをかくように座りこんでトランポリンをゆっくりと揺らす。当然私もいっしょに揺れていたのだが、まるでゆ

うちゃんとふたりで、ゆりかごにでも乗っているような心地良さだった。代わって私がトランポリンを揺らすと、ゆうちゃんは静かにしている。かなり長い時間、この沈黙のやりとりが続いていた。ゆうちゃんは突然電話のところに持って、「ほくの家は××番だよ」と言う。私は大急ぎで電話をした。

「もしもし、ゆうちゃんですか？」ゆうちゃんは何も言わなかったが、電話をかけてもらった嬉しさを体で表わしていた。ゆうちゃんはなんて言っているのかわからなかったのだろう。電話をかけてもらいたくても、「電話をかけて」と言えず「ほくの家××番だよ」と言うのを思いついたのがせいじっぱいだったぐらいなのだから。この日は初めてゆうちゃんが私といっしょに遊んだ日だった。

「生命の動き出し・表現へ向けて」

五、六回目のセッションで目だったことは白い大きなボールにしがみついていたのしかかったり、おっこちたりす

る格闘を何度も何度もくりかえしていたことだった。球との格闘がまるで僕という確かさと取り組んでいるように感じられた。汽車にまたがって走ったり、自動車を手にもって床を走らせたり、うば車を押して歩いたり、動くものといっしょにゆうちゃんは動き始めた。ボーリングのピンを部屋のあちこちにいくつかずつまとめて置いたり、移動したりする。彼の身体の中を動き出した生命に従って動き、配置をしているようなそんな気がした。ゆうちゃんを私との関係が確かになると、ゆうちゃんは自分をも確かにしはじめた。それがボールとの格闘と思われる。そしてこの姿はゆうちゃんの生命が流れ始め、根源的存在世界の生成性を汲みあげることができ始めたとも考えられる。

七回目のセッションでは、立ってトランポリンを飛びながら箱庭の棚の人形をめがけてピストルをバンバン打っていた。私がそばで色画用紙を出していると、突然やってきて、紙を四つに折り、「おさいふ」と言って、すぐにまたトランポリンにもどる。

ゆうちゃんの生命の流れがより活性化し、拡散していったように感じられていた気持の動きもずいぶんまとまってきたように思われ攻撃のエネルギーは目的に向かうようになった。そして意味ある形を創り始めた。表現の始まりである。

その後、箱庭の棚にあるカエルが気に入りになった。家でもカエルをもちょうことがあったり、プレイルームでもカエルの歌を歌ったり、カエルはゆうちゃんの特
別な仲間になった。その後仲間入りしたのは手で操作すると口を大きくあける。バックンガッチャンである。

トランポリンの飛び方は、ひっくりかえったり、こぐようにしたりバリエーションが複雑になった。そしてゲラゲラおなかの底から、全身で笑いこぼる。いっしょにいる私もとても楽しい。ゆうちゃんの顔はとってもかわいくて、いきいきとしている。

「捨てる遊び・ゴミ車53台の爆発」

十二回目のセッションでは、プレイルームのままごと

箱をかきまぜ、「わーくさっている」「まきぐそみたい」だと汚ない物を次々と捨てる遊びをすることがあった。

その遊びは次回に、ゴミ集め遊びに変わった。ゴミ1号車〜53号車まで各々、ゴミを集め持っていくと、車は爆発してこわれてしまう。ゴミ車は53回も殺され、53回生き返った。

「指輪と万華鏡・戦い・自動車の完成」

十六回目、私にプレゼントを持ってきた。ガンダムの絵のついた箱の中から、ルビーの指輪と万華鏡をこわして出したというビーズを見せて、そっとしまった。この日はエネルギーで体を思いっきり使い、「宇宙線のバリアに入りました」と機関銃を向けて挑発してくる。

私も、「バリア溶解光線ビビビ」と激しい打ち合いになる。さんざん打ち合いをすると、ピタッとやめて床に座り込み、ブロックを組みたて始めた。かなり時間をかけて完成させたのは自動車だった。壁に自動車をぶつけていた頃のゆうちゃんの姿はどこにも見つけられない。

「うんこごっこから、かくれんぼへ」

十七回目安心してうんこを出せるようになったらしい。以前クサイと捨てていた「まきぐそ」（ソフトクリームの上だけ）を、「まきぐそだ」と喜んでおしりにあて、「ウンコポタッ」とうんこをして喜んだ。この日は二人で、「うんこポタッ」を合唱しながらうんこごっこをした。この頃はうんこ、しょんべん、おちんちん、おしりとやたら口にする。言ってみたくてしようがないという感じだ。また楽器を使って即興演奏の合奏をしたり、体ごと私にぶつかってきては投げとばされたり、さかさまにされたり全身を使った遊びを喜んだ。彼の体にしっかりとつけられていたよろいがとれた感じに気づいた。力強くなったなあという感じがする。

こうして全身を自分のものにし二十回目ではかくれんぼ遊びをしたのだった。

「いっぱい遊んで、最後に」

三十三回目のセッションである。本当にいっぱい遊んだ。ゆうちゃんはもうすぐ一年生だ。ブロックの箱をとり出し、設計図を開く。その中からつくるものを決め、必要な部品をそろえていく。部品の足りないものは形を変えてつくっていく。こういう変更もできるようになった。自動車、飛行機自動車、船をつくりたかったが変更したロボットの三つの作品が完成した。「こわさないでほしい」というのに応えて、私の机にしまったのを確認し、にこっとして「さよなら」をした。あんなにいやがっていたおわかれだったのに。あっさりとした最後だった。相談室ですることが終わったのであろう。

もちろん来談動機となったことはいつしか解決していた。ゆうちゃんは根源的世界の暗さをどこかで知りながら、その世界の生成性や創造性を汲みあげ、遊びこむ力を持ったかわいらしさを感ずる子に育っていた。

（このはな児童学研究所）